

中国における高大接続制度の実践と課題 —CAP(Chinese Advanced Placement)実施校の観点から—

郭 曉博

はじめに

近年高大接続の制度改革は重要な政策課題となっている。日本の場合、大学入学試験制度に着目する研究は多いが、学力基準以外の選抜プログラムの開発とその制度化、あるいは選抜以外の教育課程の接続に関する検討は少ない。また諸外国の接続プログラムに関する研究も、個別の事例を紹介する段階に留まっている¹。高大接続が制度化される中、高校教育から大学教育へという高大接続の改革が主流である。ゆえに大学は、受け入れ側としてどのように高校から送り出された学生を円滑に受け入れるかが重視され、それに対応できる大学入試・評価制度及び教育課程の改革を実施する必要性が指摘される。他方大学から高校へという観点からは、大学の求める人材を選抜し育成する、つまり大学のアドミッション・ポリシーに注目することは、制度化された高大接続に関する研究は依然として少ない実情にある。

そのため、高校・大学双方にメリットのある高大接続制度の継続性が担保されないのではないかと懸念も見られる。今まで中国で実施する高大接続プログラムは、個別の高校と個別の大学の連携段階にとどまっており、高大接続制度としての伝播・継続がまだ十分に発揮できていない。ゆえに個別の高大接続の枠組みから、早晩米国の Advanced Placement（以下、AP）のように大規模な大学・高校協働体制への移行が図られなければならないまい。いずれにしても、接続可能な環境・仕組みの構築は重要な検討課題となると思われる。高大接続制度の組織者は制度の実施後、それを継続させるための必要な支援策を図らなければならないまい。米国では、AP の組織・運営は、大学ではなく、第三者機関であるカレッジ・ボードが担っている。AP は、近年大学が重点的に取り組まねばならない課題—国際水準を充足する質保証、グローバル人材の育成、高度人材の育成、イノベーション人材の育成等に大いに寄与貢献する可能性を秘めている。加えて、大学から高校へという観点から発展してきた高大接続は米国ではすでに制度化し、理論的・実践的な蓄積がある。その代表例としても AP が取り上げられる。アジア諸国も今後のさらなる経済発展の礎として高等教育の高度化を図るためには、大学のアドミッション・ポリシーの枠組みの中で効果的な高大接続プログラムを開発せねばなるまい。その際 AP のような高大接続の導入は、有力な処方箋の 1 つとなり得るであろう。

本研究は、上記で述べた大学から高校へと、あるいは高校と大学双方の要求を満たす高大接続制度の構築に注目し、教育制度と社会背景に相違が存在する中国に円滑に導入し、かつ継続に実施していくためには、組織者からの必要な支援方策を抽出することとする。具体的には、カレッジ・ボードによる米国の AP の仕組みをモデルにした中国教育学会が組織する Chinese Advanced Placement プログラム（以下、CAP）を検討し、その実施現状と問題点を明らかにしたうえ、中国において、高大接続が制度化する条件とそれを継続するための必要な支援策について考察する。

章構成としてまず、中国における高大接続の実施経緯とめぐる議論を明らかにする。次に、政策評価の観点から CAP の制度設計を説明する。特に第三者機関としての中国教育学会の役割と方針を抽出する。その上で、CAP が実施された 1 年間の効果と実際に学校現場に存在する課題について検討する。分析方法は、高大接続を推進する中国の CAP を取り上げ、CAP 実施 1 年後の校長、CAP 担当教員、CAP 履修学生の CAP に対する認識を、アンケート・ヒヤリング調査を通じて検証する。最終的に、CAP の高大接続制度としての効果と課題を明らかにし、中国教育学会は CAP を継続・普及するための有効な支援方策を探る。この作業により、高大接続改革を進めている日本に今後の制度改革を実施する際に、必要な整備条件、実施過程に直面する課題などの示唆を与えるであろう。

第 1 章 中国における高大接続に関する実践

中国における高大接続をめぐる議論は 1990 年代からすでに開始され、その代表的な例として南京市の金陵中学で行われた高大接続プログラムが挙げられる。金陵中学は 1996 年から 2001 年にかけて、南京大学、東南大学、浙江大学、上海交通大学、華中科技大学、西南交通大学などの中国国内のトップレベルの大学と連携し、従来の全国統一大学入学試験をもとにした評価手段の代わりに、学生の総合的な能力を評価する入試方法を取り入れていた。この実践について、①完全に整備されたシステムの構築ができないこと、②大学間の相互認定が実現できないこと、③評価基準が統一されないこと、④教育委員会からの支援が不足していること、⑤制度に対する客観的な認定評価が実現できないこと、⑥保護者や学生が高度な学習よりも、確実な進学を志向する傾向があることなどが、プログラムの継続・普及を妨げる要因であると指摘された²。また、2011 年に北京市の教育委員会は、大学教育と高校教育の接続を促進する目的で、北京市内の 8 つの高校³を選んで高大接続プログラムを実施し始めた。これらの高校は独自で高大接続プログラムを組織するという形式で進められている。北京市の高大接続プログラムに参加する B 高校の校長へのインタビュー⁴の中で、大学段階の知識を勉強することを通して、高校生が大学段階に関する知識を学習するのみならず、自分の興味関心がある分野を導くとともに、知識に対する批判的な思考力、自発的な探求力を身につけることが期待されているとの証言があった。しかし、各科目はいずれも B 高校が各大学との個別の連携であって、大学間の相互的な単位認定はまだ実現されていない。これは各高校と大学の自主性をある程度保障していると評価されるが、共通の基準が未整備であることから、その社会的通用性は高くなく、高校と大学間の大規模な連携は極めて難しいと B 高校の校長が指摘した。そして、2013 年に北京大学が全国各地の高校と連携する高大接続プログラム Advanced Pre-University Courses（以下、AC）がスタートした。AC の設置目標は①高校生が興味のある大学授業を理解し、大学に入学をする準備すること、②学力に余裕のある高校生は将来大学に入るときの専門分野の選択準備をすること、③高校生は興味がある分野への幅広く、深くチャレンジすることを通して、思考力とイノベーション能力が育成できること、④高校生の AC 履修経験や試験成績は大学側が入試選抜する時の参考として活用できることが挙げられる⁵。2017 年 1 月現在で 196 校の高校が参加している⁶。しかし、AC は北京大学と複数の高校との連携であり、評価基準、大学入学条件としての通用性が限られており、そのさらなる普及が難しいとの批判もある。いわゆる高大接続を規模的に拡大させるためには、評価基準の統一、評価の通用性が重要な要素であると言える。

こうした経験をもとに、2014年にCAPが、中国教育学会の組織の下で複数の大学と複数の高校が接続できるような仕組みを提供することを目的として展開されることになった。CAPが通用性、評価基準の統一性が強調されていることで制度の設計、制度の導入段階においてはCAPは評価できよう。だが、制度として、その汎用性と継続性に対する検討もなされる必要がある。特に、学校現場において実施する際に、各高校の個性を尊重しながら、高校教員と高校生の最大ポテンシャルを生かすことが可能であるかどうか、検討の範囲に入れるべきであると思われる。高大接続制度としてのCAPは今後さらなる規模の拡大が予想されており、新しく取り組みを始める大学と高校に示唆を与えることが高大接続政策としての意義の一つである。以下で、こうした課題意識を踏まえながら、CAPを政策評価の観点から検討してみる。

第2章 分析枠組

第1章で述べた高大接続の継続・普及を妨げる要因に付け加えて、制度の継続性という観点から見ると、中国における高大接続制度に対する追跡的な政策評価が欠如していることが指摘できる。また、資金援助が終了した後、高大接続を自主的に促進できる環境がまだ完全に整備されていないことも挙げられる。特に、学校現場では、どのようにこういった高大接続政策を継続的に実施するか、また、政策設計者がどのように支援するかということについて、中国における高大接続においては、最も注目すべきことであろう。本稿は今までに実施されてきた中国の高大接続を研究し、その課題を抽出したうえ、制度として取り込まれているCAPが今後、より継続的に実施・普及できるような必須条件とそれを担保する支援策を探ることを目指す。分析手法はCAPを実施する高校現場において、意識されている課題、求めている支援の詳細を探ることとする。はじめにでも述べたが、最終目的はCAPの組織者である中国教育学会の果たすべき役割、およびCAP実施中に発生した課題と対応策を明らかにすることとする。繰り返になるが、中国教育学会はCAPを組織する第三者機関として、教育の中立性を保ちながら、大学と高校の有識者の参画を得て、専門的な指導・助言を行使することがその役割である。だが、果たして、第三者機関として、大学と高校のそれぞれの活動を尊重したうえ、高大接続段階の教育の質を向上させるには効果をもたらしたかどうかを明らかにする必要があると思われる。また、大学と高校のそれぞれの個性を保ちながら、画一性を強化しないような施策をどのように実現するのかについても検討する必要がある。さらに、実施後にもたらした効果について、どのように活用されるか、社会の各利益団体にどのように認められるのかについての検証も重要である。したがって、中国教育学会はCAPをどのように制度として推進するのか、また、どのように大学と高校の接続を効率よく促進するのかを明確な方針を示すことが期待される。次章で、まず、CAPの制度設計について、説明する。

第3章 CAPの制度設計

CAPは、1) 学生選抜の多様性、2) 高大接続を通して、高校教育と大学教育の「ズレ」を改善すること、3) 学生の個人発達を促進すること、4) 頭脳流出を防止すること、5) 国際基準を満たすことを目的として進められている⁷⁾。2014年に実施してから、2年間が経っており、89校から109校までに増えてきた⁸⁾。量的な増加が明確である一方、質的な効果はどれくらい認識されているのかを明らかにすること

が非常に重要であると思われる。

中国教育学会副会長の楊念魯氏がCAPの実施方針を示していた。具体的に、中立性、科学性、公平性の3つの理念が強調された⁹。中立性は、中国教育学会は政府行政機関から離れる第三者機関として、大学と高校の接続を促進することに務めること、及び必要な人的・物的支援を提供することである。科学性は、CAPを実施する際に大学教員と高校教員から構成する専門家チームを組織し、教員研修、授業設計、教材開発、成績評価などを理論と実践両方の観点から検討することを目指している。公平性は、地域格差が激しい中国においては、より多くの高校生がCAPに参加・体験できるような仕組みを取り込まないといけないという課題意識から提起されるものである。公平性を実現するためには中国教育学会は2015年6月からインターネット上でMOOCを活用しはじめた。MOOCはより多くの高校生が利用できるように、全国規模で実施・普及するように工夫されている。

次章から、3つの方針を示したCAPが学校現場にどのように認識されているのかを考察する。具体的には、CAP実施校の管理職、CAP担当教員、CAP履修学生の3者の回答で考察する。実際に学校現場から中国教育学会の役割はどのように認識しているのか、必要な支援が何なのかを明確に分析する。次章で、CAP授業実施の効果について、アンケートの結果をもとに検討する。

第4章 CAP授業実施の効果

前章では、CAP実施方針を明らかにした。本章はCAP授業実施の時にもたらした効果について、アンケート調査の結果をもとに、分析する。アンケート調査の詳細は以下である。

筆者は2015年11月から12月の2ヶ月にわたって、アンケート調査を行った。アンケートの対象はCAPプログラムを実施する高校の校長、CAP担当教員、CAP履修学生の3者に分けて行った。サンプル数は校長が13人で、教員が75人で、学生が750人である。以前の拙稿では、教員がCAP教員研修への参加を通して求められる資質能力がどれぐらい成長しているのか、高大接続の教員研修を通して、教員が他の一般科目での専門性と指導力はどれぐらい向上したのかについて検討した¹⁰。本稿はその継続研究で、CAPの導入が、学校現場に与えた効果およびもたらした課題を明らかにすることとする。次節では、まず校長向けの調査結果をもとに、分析する。

4.1. 校長回答

校長向けのアンケートの有効回答は13人である。質問項目はi) 教育内容を完成させたこと、ii) 生徒の大学レベル授業の向上、iii) 生徒のイノベーション能力の向上、iv) 生徒の学習意欲の向上の4つを設けた。選択肢を「非常に満足する」、「とても満足する」、「どちらともいえない」、「あまり満足しない」、「まったく満足しない」の5件法とした。

校長への調査結果からは校長がCAP授業の実施結果について全体として満足すると捉えている傾向が見える。だが、課題も意識されている。具体的に見ると、i) 教育内容を完成させたという質問について、「どちらともいえない」と答えたのは46.15% (6人) で、「非常に満足する」と答えたのは23.08% (3人) であるが、「とても満足する」の回答率は23.08% (3人) であった。「あまり満足しない」と回答したのは、7.69% (1人) で、「まったく満足しない」と答えたのが0% (0人) であった。ii) 生徒の大学レベル授業の向上は「どちらともいえない」と答えたのは30.77% (4人) で、「非常に満足する」

23.08%（3人）で「とても満足する」と答えたのは46.15%（6人）である。「あまり満足しない」と「まったく満足しない」と答えたのは両方とも0%（0人）であった。iii) 生徒のイノベーション能力の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは30.77%（4人）であった。「非常に満足する」と答えたのは23.08%（3人）で、「とても満足する」の回答率は46.15%（6人）である。「あまり満足しない」と「まったく満足しない」と答えたのは両方とも0%（0人）であった。iv) 生徒の学習意欲の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは23.08%（3人）であるのに対し、「非常に満足する」、「とても満足する」と答えたのはそれぞれ30.77%（4人）と46.15%（6人）である。「あまり満足しない」と「まったく満足しない」と答えたのは両方とも0%（0人）であった（表1）。

表1. CAP 授業実施後の効果（校長回答）

質問	まったく満足しない	あまり満足しない	どちらともいえない	満足する	非常に満足する
i) 教育内容を完成させた	0(0%)	1(7.69%)	6(46.15%)	3(23.08%)	3(23.08%)
ii) 生徒の大学レベル授業の向上	0(0%)	0(0%)	4(30.77%)	6(46.15%)	3(23.08%)
iii) 生徒のイノベーション能力の向上	0(0%)	0(0%)	4(30.77%)	6(46.15%)	3(23.08%)
iv) 生徒の学習意欲の向上	0(0%)	0(0%)	3(23.08%)	6(46.15%)	4(30.77%)

(n=13)

4-2. 教員回答

教員向けのアンケートの有効回答は75人である。質問項目は校長と同じく、i) 教育内容を完成させたこと、ii) 生徒の大学レベル授業の向上、iii) 生徒のイノベーション能力の向上、iv) 生徒の学習意欲の向上の4つを設けた。選択肢を「非常に満足する」、「とても満足する」、「どちらともいえない」、「あまり満足しない」、「まったく満足しない」の5件法とした。

教員への調査結果からは教員がCAP授業の実施結果について全体として満足すると捉えている傾向が見える。だが、課題も意識されている。具体的に見ると、i) 教育内容を完成させた質問について「どちらともいえない」と答えたのは48%（36人）で、「非常に満足する」と答えたのは6.67%（5人）であるが、「とても満足する」の回答率は32%（24人）であった。「あまり満足しない」と回答したのは、9.33%（7人）で、「まったく満足しない」と答えたのが4%（3人）であった。ii) 生徒の大学レベル授業の向上は「どちらともいえない」と答えたのは38.67%（29人）で、「非常に満足する」10.67%（8人）で「とても満足する」と答えたのは38.67%（29人）である。「あまり満足しない」は8%（6人）で、「まったく満足しない」と答えたのが4%（3人）であった。iii) 生徒のイノベーション能力の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは33.33%（25人）であった。「非常に満足する」と答え

たのは9.33%（7人）で、「とても満足する」の回答率は46.67%（35人）である。「あまり満足しない」と回答したのは、9.33%（7人）で、「まったく満足しない」と答えたのが1.33%（1人）であった。iv）生徒の学習意欲の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは34.67%（26人）であるのに対し、「非常に満足する」、「とても満足する」と答えたのはそれぞれ10.67%（8人）と45.33%（34人）である。「あまり満足しない」と回答したのは、6.67%（5人）で、「まったく満足しない」と答えたのも2.67%（2人）であった（表2）。

表2. CAP 授業実施後の効果（教員回答）

質問	まったく満足しない	あまり満足しない	どちらともいえない	満足する	非常に満足する
i) 教育内容を完成させた	3(4%)	7(9.33%)	36(48%)	24(32%)	5(6.67%)
ii) 生徒の大学レベル授業の向上	3(4%)	6(8%)	29(38.67%)	29(38.67%)	8(10.67%)
iii) 学生のイノベーション能力の向上	1(1.33%)	7(9.33%)	25(33.33%)	35(46.67%)	7(9.33%)
iv) 生徒の学習意欲の向上	2(2.67%)	5(6.67%)	26(34.67%)	34(45.33%)	8(10.67%)

(n=75)

4-3. 生徒回答

生徒向けのアンケートの有効回答は570人である。質問項目はi) 教育内容を完成させたこと、ii) 大学レベル授業の向上、iii) イノベーション能力の向上、iv) 学習意欲の向上の4つを設けた。選択肢を「非常に満足する」、「とても満足する」、「どちらともいえない」、「あまり満足しない」、「まったく満足しない」の5件法とした。

生徒への調査結果からは生徒がCAP 授業の実施結果について全体として満足すると捉えている傾向が見える。だが、課題も意識されている。具体的に見ると、i) 教育内容を完成させた質問について「どちらともいえない」と答えたのは32.81%（187人）で、「非常に満足する」と答えたのは20.18%（115人）であるが、「とても満足する」の回答率は37.54%（214人）であった。「あまり満足しない」と回答したのは、5.26%（30人）で、「まったく満足しない」と答えたのが4.21%（24人）であった。ii) 大学レベル授業の向上は「どちらともいえない」と答えたのは35.44%（202人）で、「非常に満足する」が20.53%（116人）で「とても満足する」と答えたのは35.96%（205人）である。「あまり満足しない」は4.21%（24人）で、「まったく満足しない」と答えたのが4.04%（23人）であった。iii) イノベーション能力の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは24.91%（142人）であった。「非常に満足する」と答えたのは26.32%（150人）で、「とても満足する」の回答率は42.28%（241人）である。「あまり満足しない」と回答したのは、2.11%（12人）で、「まったく満足しない」と答えたのが4.39%

(25 人)であった。iv) 学習意欲の向上について、「どちらともいえない」と答えたのは 21.93% (125 人)であるのに対し、「非常に満足する」、「とても満足する」と答えたのはそれぞれ 28.25% (161 人)と 42.63% (243 人)である。「あまり満足しない」と回答したのは、3.16% (18 人)で、「まったく満足しない」と答えたのも 4.04% (23 人)であった(表 3)。

表 3. CAP 授業実施後の効果(生徒回答)

質問	まったく満足しない	あまり満足しない	どちらともいえない	満足する	非常に満足する
i) 教育内容を完成させた	24(4.21%)	30(5.26%)	187(32.81%)	214(37.54%)	115(20.18%)
ii) 大学レベル授業の向上	23(4.04%)	24(4.21%)	202(35.44%)	205(35.96%)	116(20.35%)
iii) イノベーション能力の向上	25(4.39%)	12(2.11%)	142(24.91%)	241(42.28%)	150(26.32%)
iv) 学習意欲の向上	23(4.04%)	18(3.16%)	125(21.93%)	243(42.63%)	161(28.25%)

(n=570)

第 5 章 実際の CAP 授業実施中の課題

前章では、CAP 授業実施中の効果について、校長、教員、生徒の 3 者の観点から分析した。本章では CAP 実施中に実際に意識されている課題を明らかにすることとする。

5-1. 大学との接続状況に対する認識

大学の接続状況に対する意識調査においては、校長が CAP はどのような授業であるかとの質問に対し、大学授業が 31% (4 人)で、高大接続授業が 54% (7 人)、高校授業 15% (2 人)で、大学入学試験の一部が 0% (0 人)、その他が 0% (0 人)との回答であった。教員が CAP はどのような授業であるかとの質問に対し、大学授業が 31% (23 人)で、高大接続授業が 61% (46 人)、高校授業 4% (3 人)で、大学入学試験の一部が 0% (0 人)、その他が 4% (3 人)との回答であった。生徒が CAP はどのような授業であるかとの質問に対し、大学授業が 35% (197 人)で、高大接続授業が 60% (342 人)、高校授業 1% (7 人)で、大学入学試験の一部が 1% (6 人)、その他が 3% (18 人)との回答であった。

CAP が大学入学試験との繋がりが大きいかどうかの質問に対し、校長が「とても大きい」が 8% (1 人)、「どちらともいえない」が 31% (4 人)、「あまりない」が 46% (6 人)、「まったくない」が 15% (2 人)との回答であった。教員が「とても大きい」が 1% (1 人)、「どちらともいえない」が 43% (32 人)、「あまりない」が 41% (11 人)、「まったくない」が 15% (11 人)との回答であった。生徒が「とても大きい」が 15% (83 人)、「どちらともいえない」が 47% (270 人)、「あまりない」が 28% (158 人)、「まったくない」が 10% (59 人)との回答であった。

CAP は高大接続授業であるとの認識が高い一方、全国大学入学試験制度への有効な取組として、まだ各学校からの期待はそれほど高くはないと見える。

5-2. 学校現場における実施現状及び課題

前節では、CAPの大学との接続状況に対する意識を明らかにした。本節では、CAPが学校現場で実施されるときに起こった課題について、制度評価の観点から分析する。

学校現場ではどのような課題を認識しているのかについて、CAP実施校の校長、教員と生徒にアンケートを行った。次節では、校長が認識する課題について詳しく分析する。

5-2-1. 校長回答

まずは校長からの調査結果を見る。校長への質問項目は i) 生徒の学習意欲の低さ、ii) 大学レベル授業に対する受け入れの限界、iii) 生徒のイノベーション能力の不足、iv) 教材内容の設計問題、v) 施設・設備の不十分、vi) 情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）の6つを設けた。選択肢を「非常にある」、「とてもある」、「どちらともいえない」、「あまりない」、「まったくない」の5件法とした。

表4. CAPの実施中に存在する課題（校長回答）

質問	非常にある	とてもある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
i) 生徒の学習意欲の低さ	0(0%)	3(23.08%)	4(30.77%)	4(30.77%)	2(15.38%)
ii) 大学レベル授業に対する受け入れの限界	0(0%)	4(30.77%)	3(23.08%)	6(46.15%)	0(0%)
iii) 生徒のイノベーション能力の不足	0(0%)	3(23.08%)	6(46.15%)	3(23.08%)	1(7.69%)
iv) 教材内容の設計問題	2(15.38%)	5(38.46%)	4(30.77%)	2(15.38%)	0(0%)
v) 施設・設備の不十分	0(0%)	1(7.69%)	0(0%)	8(61.54%)	4(30.77%)
vi) 情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）	4(30.77%)	3(23.08%)	2(15.38%)	3(23.08%)	1(7.69%)

(n=13)

校長への調査結果からは学校がCAPへの参加を通して全体として成長すると捉えている傾向が見える¹¹。だが、課題も意識されている。具体的に見ると、i) 生徒の学習意欲の低さについて「どちらともいえない」と答えたのは30.77%（4人）で、「非常にある」と答えたのは0%（0人）であるが、「とてもある」の回答率は合計23.08%（3人）であった。ii) 大学レベル授業に対する受け入れの限界については「どちらともいえない」と答えたのは23.08%（3人）で、「非常にある」と答えたのは0%（0人）であるが、「とてもある」の回答率はそれぞれ30.77%（4人）である。iii) 生徒のイノベーション能力の不足について「どちらともいえない」と答えたのは46.15%（6人）で、「とてもある」と回答したのは23.08%（3人）である。iv) 教材内容の設計問題について「非常にある」と答えたのは15.38%（2人）であるが、「とてもある」の回答率は38.46%（5人）であった。「どちらともいえない」と答えたのは30.77%（4人）であった。一方、課題がないとの回答が15.38%（2人）しかない。v) 施設・

設備の不十分は「どちらともいえない」と答えたのは0%（0人）で、「とてもある」と答えたのは7.69%（1人）である。「あまりない」、「まったくない」と答えたのが合計で92.31%（12人）であった。vi）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）について、「どちらともいえない」と答えたのは15.38%（2人）であった。「非常にある」と答えたのは30.77%（4人）で、「とてもある」の回答率は23.08%（3人）である。「あまりない」と回答したのは、23.08%（3人）で、「まったくない」と答えたのが7.69%（1人）であった（表4）。

5-2-2. 教員回答

次は教員からの調査結果を見ていく。有効回答は75人である。教員への質問項目は校長と同じく、i）生徒の学習意欲の低さ、ii）大学レベル授業に対する受け入れの限界、iii）生徒のイノベーション能力の不足、iv）教材内容の設計問題、v）施設・設備の不十分、vi）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）の6つを設けた。選択肢を「非常にある」、「とてもある」、「どちらともいえない」、「あまりない」、「まったくない」の5件法とした。

表5. CAPの実施中に存在する課題（教員回答）

質問	非常にある	とてもある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
i）生徒の学習意欲の低さ	5(6.67%)	7(9.33%)	38(50.67%)	19(25.33%)	6(8%)
ii）大学レベル授業に対する受け入れの限界	3(4%)	16(21.33%)	35(46.67%)	17(22.67%)	4(5.33%)
iii）生徒のイノベーション能力の不足	3(4%)	21(28%)	31(41.33%)	16(21.33%)	4(5.33%)
iv）教材内容の設計問題	6(8%)	18(24%)	30(40%)	16(21.33%)	5(6.67%)
v）施設・設備の不十分	4(5.33%)	2(2.67%)	30(40%)	14(18.67%)	25(33.33%)
vi）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）	11(14.67%)	23(30.67%)	22(29.33%)	10(13.33%)	9(12%)

(n=75)

教員への調査結果からは学校がCAPへの参加を通して全体として成長すると捉えている傾向も見える¹²。だが、課題も同時に意識されている。具体的に見ると、i）生徒の学習意欲の低さについて「どちらともいえない」と答えたのは50.67%（38人）で、「非常にある」と答えたのは6.67%（5人）であるが、「とてもある」の回答率は9.33%（7人）であった。「あまりない」と回答したのは、25.33%（19人）で、「まったくない」と答えたのが6%（8人）であった。ii）大学レベル授業に対する受け入れの限界については「どちらともいえない」と答えたのは46.67%（35人）で、「非常にある」と答えたのは4%（3人）であるが、「とてもある」の回答率は21.33%（16人）である。「あまりない」と回答したのは、22.67%（17人）で、「まったくない」と答えたのが5.33%（4人）であった。iii）生徒のイノベーション能力の不足について「どちらともいえない」と答えたのは41.33%（31人）で、「非常にある」

と「とてもある」と回答したのはそれぞれ4%（3人）と28%（21人）であった。「あまりない」と回答したのは、21.33%（16人）で、「まったくない」と答えたのが5.33%（4人）であった。iv）教材内容の設計問題について「非常にある」と答えたのは8%（6人）であるが、「とてもある」の回答率は24%（18人）であった。「どちらともいえない」と答えたのは40%（30人）であった。一方、「あまりない」と回答したのは、21.33%（16人）で、「まったくない」と答えたのが6.67%（5人）であった。v）施設・設備の不十分は「どちらともいえない」と答えたのは40%（30人）で、「非常にある」5.33%（4人）で「とてもある」と答えたのは2.67%（2人）である。「あまりない」は18.67%（14人）で、「まったくない」と答えたのが33.33%（25人）であった。vi）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）について、「どちらともいえない」と答えたのは29.33%（22人）であった。「非常にある」と答えたのは14.67%（11人）で、「とてもある」の回答率は30.67%（23人）である。「あまりない」と回答したのは、13.33%（10人）で、「まったくない」と答えたのが12%（9人）であった（表5）。

5-2-3. 生徒回答

次は生徒からの調査結果を見てみよう。有効回答は570人である。生徒への質問項目はi）教材内容の設計問題、ii）施設・設備の不十分、iii）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）の3つを設けた。選択肢を「非常にある」、「とてもある」、「どちらともいえない」、「あまりない」、「まったくない」の5件法とした。

表6. CAPの実施中に存在する課題（生徒回答）

質問	非常にある	とてもある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
i）教材内容の設計問題	41(7.19%)	64(11.23%)	178(31.23%)	207(36.32%)	80(14.04%)
ii）施設・設備の不十分	0(0.0%)	48(8.42%)	127(22.28%)	225(39.47%)	170(29.82%)
iii）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）	48(8.42%)	55(9.65%)	165(28.95%)	230(40.35%)	72(12.63%)

(n=570)

生徒への調査結果からは学校がCAPへの参加を通して全体として成長すると捉えている傾向が見える¹³。だが、課題も意識されている。具体的に見るとi）教材内容の設計問題は「どちらともいえない」と答えたのは31.23%（178人）で、「非常にある」7.19%（41人）で、「とてもある」と答えたのは11.23%（64人）である。「あまりない」は36.32%（207人）で、「まったくない」と答えたのが14.04%（80人）であった。ii）施設・設備の不十分は「どちらともいえない」と答えたのは22.28%（127人）で、「非常にある」0.0%（0人）で、「とてもある」と答えたのは8.42%（48人）である。「あまりない」は39.47%（225人）で、「まったくない」と答えたのが29.82%（170人）であった。vi）情報の不足（授業の関連資料と試験情報など）について、「どちらともいえない」と答えたのは28.95%（165人）であった。「非常にある」と答えたのは8.42%（48人）で、「とてもある」の回答率は9.65%（55人）である。「あまりない」と回答したのは、40.35%（230人）で、「まったくない」と答えたのが12.63%（72人）であった

(表6)。

第6章 考察

本稿は CAP の制度開始後の学校現場に与えた影響及び存在する課題を明確にした。中国教育学会は CAP に対する制度設計について、AP をモデルにして、中国式高大接続の実現に努めている。CAP の実施が大学と高校の接続を促進するためには、中国教育学会の役割が重要であり、第三者機関として、その中立性、科学性、公平性が重視され、より多くの大学と高校が参加できるような仕組みになるための工夫が見える。以下で2点の考察を記す。

第一に、本稿は高大接続を実施する際にもたらした効果について分析した。その結果、実際の高校現場では、CAP の実施が効果をもたらしたと肯定的に評価をするが、高大接続に対する認識、理解は未だに低い。アンケートの結果から分かるように、校長、教員の CAP の実施効果に対する評価がそれぞれ違っている。校長が CAP の実施による生徒の学習意欲の向上などを肯定的に評価しているのに対し、教員と生徒は期待したほど効果向上には貢献していないと捉えている。i) 教育内容を完成させたこと、ii) 生徒の大学レベル授業の向上、iii) 生徒のイノベーション能力の向上、iv) 生徒の学習意欲の向上の4つの質問について、校長と CAP 担当教員のずれが大きく、「教育内容を完成させたこと」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 5.64 ポイントの差があり、「生徒の大学レベル授業の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 12 ポイントの差が存在する。「生徒のイノベーション能力の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 10.66 ポイントの差が存在する。「生徒の学習意欲の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 9.34 ポイントの差が存在する。校長が代表する管理職と教員間の意思疎通の問題が十分には改善されていないことが分かる。

また校長と生徒の認識ずれも大きい。「教育内容を完成させたこと」については「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 1.78 ポイントの差に留まり、それほど大きくないが、「生徒の大学レベル授業の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 8.25 ポイントの差が存在する。「生徒のイノベーション能力の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 6.50 ポイントの差が存在する。「生徒の学習意欲の向上」には「まったく満足しない」と「あまり満足しない」の合計は 7.20 ポイントの差が存在する。校長、教員と生徒の3者の比較からは、CAP を実施する担当教員の CAP の実施に対する期待が高い一方、実際に感じた効果は十分には達成されていないことが分かる。

第二に、高大接続を実施する際に意識した課題について分析してみた。全体的に肯定的な評価をされたが、「教材内容の設計問題」と「情報の不足(授業の関連資料と試験情報など)」の問題が読み取れる。具体的に、「教材内容の設計問題」には「非常にある」と「とてもある」の合計はそれぞれ 53.85% (校長)、45.34% (教員)、18.07% (生徒) になっている。「情報の不足(授業の関連資料と試験情報など)」には、「非常にある」と「とてもある」の合計はそれぞれ 53.84% (校長)、32% (教員)、18.42% (生徒) になっている。そのほか、「生徒の学習意欲の低さ」、「大学レベル授業に対する受け入れの限界」、「生徒のイノベーション能力の不足」、「施設・設備の不十分」は特に課題とされていないが、それほ

ど効果が明確であったとは言えない。学校現場では、よりよい教材の提供・整備が期待されることが今回の調査から伺える。また、校長、教員と生徒が授業の関連資料と試験情報などの提供が不足していると回答した割合は非常に高く、CAP が実際の授業を展開するためには、さらなる情報提供が必要であることが窺える。CAP は学校現場からの要求に十分に対応できるとは言えない。今回のアンケートからは CAP 実施校の校長、CAP 担当教員、CAP 履修生徒は CAP の今度のさらなる制度整備を期待していることが伺える。

そのほか、アンケートの結果から分かるように、校長、教員の CAP に対する評価がそれぞれ違っている。校長の方が比較的に高い評価をしたが、教員と生徒は CAP の実施時に感じた効果がそれほど大きくなく、感じた課題は比較的に多い。学校現場においては、校長、教員と生徒の交流をより促進する環境づくりも同時に重要な課題であろう。

以上はアンケート調査から得られた示唆である。CAP は高大接続の制度普及に効果をもたらすことが期待される。だが、学校現場、特に教員と生徒の要望に応答、さらに対応するためには、情報提供、教材開発、授業内容、試験形式などを改善していくべきである。本稿の検討を通じて CAP が学校現場における実施によって獲得した効果が明確であるが、まだ十分に発揮されていないことが判明した。CAP をより普及・拡大させるためには、組織・運営を担っている中国教育学会のさらなる支援が必要である。

一方本稿は学校現場の観点から CAP の実施状況及び課題を明らかにした。しかしそれを実装するには、大学間連携への参加大学のレベル、特色、範囲や、大学カリキュラム編成、評価基準、教員養成と資格認定基準の3つの要素の標準化について、さらに考察を深めることが肝要であろう。今回の分析ではそこまでフォローできなかったが、今後の検討課題としたい。

註

- ¹ 小川佳万『東アジアの高大接続プログラム（高等教育研究叢書 115）』広島大学高等教育研究開発センター，2012 年。
- ² CAP ホームページ <http://www.csecap.com/NewsDetail.aspx?nid=42> 【最終確認：2017-1-30】
- ³ 人民大学附属高校、北京四中、北京第十二中学、北京十一学校、北京師範大学附属高校、北京師範大学第二附属高校、清華大学附属高校、広渠門中学。
- ⁴ インタビューは2014年9月に行われた。
- ⁵ 北大公学ホームページ <http://www.pkucollege.com/hangyenews/403.html> 【最終確認：2017-1-30】
- ⁶ 中国大学先修課程（AC）ホームページ <http://www.acourses.net/ac/Com/Introduce.aspx> 【2017-1-30】
- ⁷ 中国大学先修課程試点项目管理委員会『2015 年中国大学先修課程（CAP）試点項目実験学校第三期教員培訓手冊』2015 年 7 月。
- ⁸ CAP ホームページ <http://www.csecap.com/NewsDetail.aspx?nid=42> 【最終確認：2017-1-30】
- ⁹ 「做一件有意義的事情—大学先修課程的中国之路」2017 年 1 月 17 日
CAP ホームページ <http://www.csecap.com/NewsDetail.aspx?nid=183> 【最終確認：2017-1-30】
- ¹⁰ 郭曉博「CAP 教員研修の効果と課題—学校現場の実態に注目して—」『教育行政論叢』第 13 号，2016 年，29-41 頁。
- ¹¹ 郭曉博，前掲論文，35 頁。
- ¹² 郭曉博，前掲論文，37 頁。
- ¹³ 郭曉博，前掲論文，38 頁。

Practice and Issues of Articulation between Upper Secondary Schools and Universities in China:
From the viewpoint of the enforcement school of the Chinese Advanced Placement (CAP)

Guo, Xiaobo

This paper will focus on Upper Secondary Schools and Universities of Chinese Advanced Placement (CAP), to verify effects and challenges of CAP. Specifically this paper is intended to review the role of the Chinese Society of Education that organizes CAP. It will try to explore on the basis of the questionnaire survey of the three parties, CAP implementation schools of managers, CAP participating teachers, students who are taking the CAP class.

The result shows that first, in high schools, we evaluate positively that implementation of the CAP has effected, but recognition and understanding of the Articulation between Upper Secondary Schools and Universities is still far from being enough. As can be seen from the results of the questionnaire, the evaluation of the effectiveness of the principal and faculty's CAP implementation is different. While the principal positively evaluates the motivation for students to learn by implementing CAP, teachers and students do not appreciate it much.

Second, although it was evaluated positively as a whole, there are problems of "design problem of teaching material "and "lack of information (related materials of the lesson and test information etc.)". In addition, not only CAP, it can be assumed that the cause is present in the environment surrounding the school.

From now on, in order to respond to the needs of school, especially faculty teachers and students, the Chinese Society of Education should improve information provision, teaching material development, lesson content, exam format and so on.

Keyword : Articulation between Upper Secondary Schools and Universities ,
Effects and Challenges of CAP

